

景観フォーラム

巻頭言

1980 年代から情報通信技術（Information and Communication Technology）社会が始まったとすれば現在ほぼ半世紀の時代を経てきたことになる。人類が産業革命を成し遂げるその総仕上げとしての有様がこの情報通信技術社会というものである。人類が言葉を発明し、言語文化から情報文化社会を創り上げ、人類がどこにいても、世界の情報を得ることが出来るようになった。即ち、情報こそが人類の強さを発揮できる場であり、他の種から隔絶する強さの証明でもあった。人類こそこの地球上でもっとも最強の存在者であると。

王である人類は何をやってもいいということになり、ついには地球そのものを汚してしまい、気付いた時には自分自身が生存できる範囲を狭めてしまい、その生存すら危険な状況にあることを認識せざるを得ないこととなった。地球環境問題は地球が人類に退場命令を出しているのである。これほどまでに地球を穢してしまった者は地球の王としての位に値しない、と。

そこで人類が考え出したのがこの情報通信技術社会革命というものである。即ち、スマートフォン smartphone の活用により世界の情報を瞬時に獲得可能となった。人類にとり情報こそが重要であり、瞬時に情報を獲得できることが最も重要なこととなったのである。

この観点から、景観問題を考察するとき、大きな疑問が生じてくる。価値判断が最も重要問題として突き付けられる「景観」に関する事柄は価値に関する判断力をどのように醸成するのかという最も重要な課題を突き付けられるのである。

さて、2011 年 4 月 1 日付会報創刊号からほぼ 15 年間に亘りこの巻頭言を担当してまいりましたが、そろそろ後進に譲る時が迫ってまいりました。あらゆる情報がスマートフォンで収集可能となり日常生活の一部となっており、情報通信社会にはスマホは必需品であることは理解できます。しかし、どんなに時代が変わろうが、最も重要なことは、自分の目で見て確かめて、自分の価値判断から「景観」を考えることではないかと考えております。ありがとうございます。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2025 年度年間スケジュール>

＊2025 年度とは 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日のことです。

2025 年

- 4 月 22 日 (火) **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会 (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 5 月 15 日 (木) **第 1 回景観まちあるき** 【池袋】
- 6 月 24 日 (火) **第 2 回景観研究会** **オンライン (16:00～18:00)**
- 7 月 26 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** 【秩父】
- 8 月 夏休み
- 9 月 24 日 (水) **第 3 回景観研究会**
- 10 月 24 日 (金) **第 3 回景観まちあるき** 【石岡】
- 11 月 25 日 (火) **第 4 回景観研究会**
- 12 月 23 日 (火) 忘年会 (イタリアンダイニング DONA 有楽町店)

2026 年

- 1 月 24 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** 【鶴見】
- 2 月 24 日 (火) **第 5 回景観研究会**
- 3 月 21 日 (土) **第 5 回景観まちあるき** (検討中)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

<日本景観フォーラム 2024 年度年間スケジュール>

＊2024 年度とは 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日のことです。

2024 年

- 4 月 23 日 (火) **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会 (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 5 月 12 日 (日) **第 1 回景観まちあるき** 【アークヒルズ】
- 6 月 25 日 (火) **第 2 回景観研究会** (18:00～20:00) 於：JICA オフィス
- 9 月 7 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** 【代官山】
- 9 月 24 日 (火) **第 3 回景観研究会** (18:00～20:00) 延期
- 10 月 21 日 (月) **第 3 回景観まちあるき** 【洗足池】
- 11 月 19 日 (火) **第 4 回景観研究会** (14:00～16:00) オンライン会議
- 12 月 26 日 (木) 忘年会【恵比寿】中止

2025 年

- 1 月 7 日 (火) 新年会【目黒】ゆう月 (18:00～)
- 1 月 25 日 (土) **第 4 回景観まちあるき** 【麻布】
- 2 月 25 日 (火) **第 5 回景観研究会** (16:00～18:00) オンライン会議
- 3 月 29 日 (土) **第 5 回景観まちあるき** 【三軒茶屋】

看板商店建築の街に昭和が生きる 石岡

豊村泰彦



■ある意味象徴的な食堂

懐かしい昭和時代のレトロな商店や街並みを観るために、茨城県石岡を歩いた。石岡へは、私鉄や地下鉄を乗り換えて北千住駅に行きそこから常磐線で1時間半くらいとけっこう遠かった。しかもあまり快適でない通勤シートを1時間以上乗ったので本当に疲れた。というか、腹がすいた。実は、石岡は初めてではなく、20年以上前に一度来たことがあって、その時はたしか古い昔ながらの蕎麦屋さんがあったことを微かに思い出した。ただ駅からはだいぶ距離があったので、そこまで行くエネルギーが残っていない。これは駅前で食べるしかないとあたりを眺めると、駅前のロータリーを挟んで正面に「ラーメン」「定食」と書かれた看板が目に入った。他にはないかと周囲をぐるりと眺めたが、食べ物屋はそこしかない。好物である「ラーメン」があるのだからありがたいことと自分に言い聞かせ、暖簾をくぐった。



「ラーメンください」と言おうとする矢先に、店主から「麺が売り切れました」というショッキングな通告。現在時刻は昼の 12 時である。お客さんもそれほど混んでない上、看板に明確に掲げてあるラーメンの表示、さらにこれから昼ご飯というときに「売り切れ」というのはあり得るだろうか。「それはいくらなんでもおかしいだろう」と抗議を申し立てたくなったが、この近くに食べる場所は全く見当たらず、この店を出て探す体力も残っていないので、あきらめてそこで食べることにした。ラーメンしか頭になかったもので、何にするか迷ってしまい、選択ができない。迷って時間がかかると「ハイ、本日分の食材は全部売り切れました」と宣言されそうなので、慌てて第五志望程度の「チャーハン」を注文した。考えてみれば看板に「ラーメン」を表示しながらお昼はこれからいうときに、「なくなりました」とはなんという不条理。今日の街歩きはいったいどうなるのだろうと先行きが不安になった。



■集中するレトロ建築

今回の街あるきは地元のボランティアガイドさんに街を案内していただいた。街はそれほど大きくないので、地元ガイドさんの解りやすい解説を聞きながらゆったり回ることができた。この石岡という地域は平安時代頃からこの地域を基盤とする豪族がいて次第に権力を拡大していった。たいていの歴史は、農耕社会が始まって地域を支配する力のある「権力者」が世襲により支配権を受け継いでいくことで権力を維持してきた。それはこの石岡も同じで支配者として君臨し続けてきた。その権力構造は平安時代から安土桃山時代まで続いたが、江戸時代に入る前に滅んでしまった。そして長い間地域を支配してきた名残は今は遺跡として見られるだけとなった。このパターンは他の街でもよくある現象であるが、石岡の場合はそういった歴史が街の中心街には現れてこない。街には歴史的な遺産である神社も寺もあるが、最も目立つのは遺跡ではなく大正から昭和時代の建造物である。ということは、いま私たちが見ている石岡の街は江戸や明治というより、戦後の昭和の名残と見たほうがよいと思う。

街の構造は一辺が最大 500 平方メートルの四角形の商業区域とそれを囲むように建てられた神社や寺。それ以外はたぶん田んぼが囲っていたのだらうと想像される。この構造がほぼ平安時代から現在にいたるまで代々受け継がれてきたということは注目すべきところだと考える。



十七屋履物店（左）と久松商店

■街は建物なのか

石岡は街並み景観の美化に力を入れている。それが昭和レトロを感じさせる街並みとなって残っている。この街を観光資源として活用していくために石岡市では今、官民協力ののもとで「まちなかの登録文化財」に取り組んでいる。

登録文化財とは、平成 8 年から実施している登録制度で、建築後 50 年を経過し「歴史的景観に寄与している」「デザインが時代や建造物の種類の特徴を示している」「優れた技術が用いられて再現することが容易ではない」などの条件が当てはまる建造物を保存する事業である。具体的大正は主に住宅、事務所、社寺、橋、水門、トンネル、煙突などである。これらは外観を大きく変えなければレストラン資料館などの事業資産や観光資源として利用することが可能だとし、「活用しながら次の世代に伝えていくことができる」としている。

市内の登録文化財は現在 11 あるが、とくに木造の看板建築※がまとまって残っているのは珍しいとされている。

※大正末期から昭和初期にかけて東京を中心に流行した木造の店舗兼住宅様式。

■レトロ店舗を紹介

まちなかの登録文化財から主な店舗を紹介する。

○喫茶店四季

昭和 5 年頃建てられた喫茶店四季は貸店舗として建てられた建物であるが、コリント様式風の柱頭飾りや屋根に付けられた煙突風の突起物など凝った造りでたいへん貴重な建物とされている。

○平松理容店

昭和 3 年に建てられた理容店。木造 2 階建てで、コリント洋式風のアカンサスの葉の天蓋や理容鏡、理容椅子など珍しいものばかり。昭和 4 年の大火を逃れた貴重な建築物である。

○きそば東京庵

昭和 7 年くらいに建てられた蕎麦屋。木造 2 階建。もともとは和風食堂だったが、戦後に座敷部分を取り払い土間にイスとテーブルを置いた。数寄屋風の造りはこの地域では珍しい。

○すがや化粧品店

昭和 5 年に雑貨店建てられた木造 2 階建ての看板建築。現在は化粧品店。ペディメント、コリント・イオニア様式風の柱頭飾りなど異国情緒あふれるデザイン。この地区では秀逸な看板建築。

○十七屋履物店（左）と久松商店

両方とも昭和 5 年に建てられた木造 2 階建ての看板建築。昭和 4 年の大火災以降再建された。

○府中誉（株）

安政元年創業の造り酒屋。母屋、長屋門、文庫蔵、穀蔵、仕込み蔵、釜場 春屋（つきや）の 7 つの塔が登録されている。



喫茶店四季



きそば東京庵



平松理容店



すがや化粧品店

■景観を後の世代にどう受け継げばよいか

昭和に入るまでは、日本人はもっぱらお米や農産物を食べて生きてきたので、日本の景観は田んぼや畑などの農業景観を中心に形成されてきた。それは東京、大阪などの大都市以外、全国で見られ、まちというのはそれら農作物や生活用品を売り買いすることで商業圏が広がり、次第に地方都市の景観が形成されていった。そしてまちとさらに大きなまちとを結ぶ交通が発達し鉄道駅に近いところから宅地化や商業施設が建設されていった。これらは寺や神社を守る市民がいる限り継続され、しかも形態も維持されてきた。これが石岡の街の全容である。そして現在まで、石岡は大火のあった約 90 年前の景観を維持している。店も宅地もほぼ変わっていない。レトロな街並みが集中しているのが石岡の特徴だ。その雰囲気は埼玉県の川越の街を想起させられる。ただ川越と違う

のは人が極めて少ないということである。私が見た限りでは街を歩いている人の姿が見えない。人さえ歩いていれば街並みは違って見えるのだが…



府中誉（株）

■古くて新しい街づくりを

最も変わりやすいのが商業地域だが、石岡には古い建物がたくさん残っている。おそらく商業施設が一番多く次に民家多かったのだろう。しかし、この町の商業は昭和の時代から勢いが減少し、撤退する店が増えだした。それが閉じたシャッターとなって街の色が変わってきた要因なのだろう。

この現状をどうするか。町は以前の景観を取り戻そうと登録文化財に加盟して抵抗しているが、この手法だけでは難しい。このままだとかつての景観を取り戻すどころかますます過疎化が進むだろう、残った店舗も元気がなくなる。ただ古いだけの建物物になってしまう。古い建物があるだけではよい景観とは言えない。街が元気で人の存在が目立つようになるには、祭の時だけでなく日常でも街をよくしようと頑張る人が増えることだと思う。人の姿が見えなくなった町は死の街である。街をゴーストタウンにならないようにするには、まず日常からたくさんの人が歩いている、人が集まって立ち話をしている、そんな普通の景観を取り戻すことである。数十年前の石岡はたぶんそういう街だったのだろうと想像する。



トルコ・イスタンブールのモスク巡り景観まち歩き

石見茂夫

2025年5月下旬から6月上旬まで約10日間トルコのイスタンブールを訪問しました。イスタンブールは中東最大の都市で、大きなモスクも多く見どころが沢山あるので市内の観光だけにして他の都市は訪問しない予定を立てました。

イスタンブールへは以前からターキッシュエアラインズが毎日就航していますが、今春から羽田ーイスタンブール間を週2回全日空の直行便が就航する様になりこちらの便を利用することにしました。イスタンブールまでは中国を横断してウズベキスタンを通りカスピ海を横断して黒海からトルコに入る最短ルートを飛行し約12時間のフライトでした。黒海のトルコの対岸ではロシアによるウクライナ侵攻がまだ収まっていない状況ですが、何の支障も無く予定通りに到着しました。今回は数十年ぶりの中東地域の訪問で特にモスクの訪問を楽しみに出掛けました。

イスタンブールはトルコ北西部に位置しマルマラ海と黒海を結ぶボスポラス海峡を挟んで東側のアジアサイドと西側のヨーロッパサイドに分かれた2大陸におよぶ大都市です。ヨーロッパサイドの市域は金角湾で南北に旧市街地と新市街地に分かれています。1,400万人以上の人口を擁しヨーロッパ最大規模の都市の一つで、5300平方kmの広大なエリアはイスタンブール県として行政区域の県都となっている。商業や歴史の中心はヨーロッパサイドにあり2/3の住民が生活し、1/3はアジア側に居住しています。

中東の都市へはイラクのバグダッドやリビアのトリポリを度々訪れていましたが、業務に追われてモスクや遺跡をほとんど見学することが出来ませんでした。街の感じが他の中東の都市とは異なり東西の交通拠点にも成っている所以で雰囲気はヨーロッパに近い感じの第一印象でした。昔は自由社会だったイランのテヘランにも似た感じもしました。

◎ ブルーモスク（スルタン・アメフト・ジャミイ）（Sultanahmet Camii）

スルタン・アフメト・ジャミイは1616年にアフメト1世により建造され、「ブルーモスク」という名で広く知られています。ブルーモスクという愛称は内装の壁や天井や柱等がイズニックタイルで覆われその青色が美しいことから一般的に呼ばれるようになりました。



ブルーモスクは世界のイスラム教のモスクでも珍しい6本の尖塔（ミナレット）があり他のモスクより大きく偉大に見えます。建設当時にアフメト1世から建設依頼を受けた設計者が「アルトゥン（黄金）の塔を」と指示されたのを「アルトゥ（6本）」と聞き違えて尖塔が6本になったと伝えられています。世界中に有るモスクの中でも美しい6本のミナレットをもつモスクはブルーモスクだけです。

モスク内部に巨大なドームを戴く礼拝堂があり、壁には唐草模様にチューリップやユリなどの花模様が描かれたタイルが2万枚以上使用されています。約260枚のステンドグラスの小窓から差し込む太陽光が、タイルを照らし色彩豊かな光が礼拝堂に差し込み世界一美しいモスクと称されています。



◎ アヤソフィア (Ayasofya-i Kebir Cami-i Serif)

アヤソフィアはトルコの世界遺産の中でも特にイスタンブールという街の変遷を象徴する建物です。532年に起こった「ニカの反乱」によって焼失した2代目アヤソフィア聖堂を、537年ビザンツ帝国のユスティニアヌス1世が再建しました。ユスティニアヌス帝の「新しい聖堂を」との命を受けた建築家アンテミオスとイシドロスは壁や柱に大理石をふんだんに使用し国中から選りすぐりの職人を集めました。

高さ約55m、直径約31mもある巨大ドームのバシリカ式聖堂は6世紀の建築技術からすると建物の壮大さや構造と共にビザンツ建築の最高傑作と評されています。

その後557年の大地震によるドームの破壊、8～9世紀頃に起きた聖画像破壊運動（イコノクラスム）によるモザイク壁画の損傷がありその度に修復されました。

現在、聖堂内にある聖母子やキリストなどのモザイク壁画は聖画像破壊運動後の作品です。ビザンツ建築と美術の粋を集めた聖堂はギリシャ正教の総本山となっています。

1453年にオスマン帝国メフメト2世がコンスタンティノープルを征服すると、都はイスタンブールと改名されアヤソフィアはイスラム教のモスクとして改修されました。



聖堂内を飾っていたモザイク壁画は漆喰で塗りつぶされ、イスラム教のミナレットやミフラーブ）、預言者ムハンマドの名が書かれた円盤などが設置されます。

アヤソフィアはオスマン帝国時代にも、幾度か修復工事が行われておりスレイマニエ・モスクを手掛けた建築家ミマール・シナンも工事に携わった一人で、修復工事はシナンに大きな影響を与えたといわれています。

約500年続いたモスクとしての歴史に終止符が打たれたのは20世紀になってからです。1923年にトルコ共和国が成立すると、初代大統領ケマル・アタチュルクの命により無宗教の博物館になることが発表されました。早速、修復作業が開始され塗り固められていた漆喰をはがすとビザンツ美術の傑作であるモザイク壁画が次々と姿を現しました。

その後2020年7月にエルドアン大統領はアヤソフィアを再びモスクに戻すと決定。

アヤソフィアはビザンツ美術とイスラム美術が混在する博物館であり、イスタンブールの都市変遷を記録に残しています。

◎ ミフリマーフ・スルタン・モスク (Mihrimah Sultan Mosque)

ミフリマー・スルタン・モスクはミフリマーフ スルタンの名前に由来しており、ミフル・ウ・マーとはペルシア語で「太陽と月」を意味しています。ミマール・シナンが1565年に設計して完成させました。

このモスクはイスタンブールで21番目に高い丘の上にあります。ドーム内部は広大で特に天井の高いデザインが特徴です。高く細いミナレットの内壁にはイスラムの詩が数多く刻まれています。

500年以上の年月が経っていますが、まったく古さを感じさせず美しい内部構造と小さな装飾で高くそびえて見えます。モスクの周辺は芝生エリアに囲まれた清めの泉のある広い中庭と、花崗岩と大理石でできたいくつかの柱で支えられた半開放的な廊下ができています。



◎ シェムシ・パシャ・モスク (Semsî Pasa Mosque)

シェムシ・パシャ・モスクはオスマン帝国の建築家ミマール・シナンにより設計された。このモスクはコンスタンティノープルの大宰相から委託された最小のモスクの1つで、市内で最も魅力的なモスクの1つになっています。建築と自然の景観を有機的に融合させるチーフアーキテクトのスキルの有名な例です。

この複合施設はボスポラス海峡の海岸線に東西に並んだほぼ長方形の場所に位置しています。



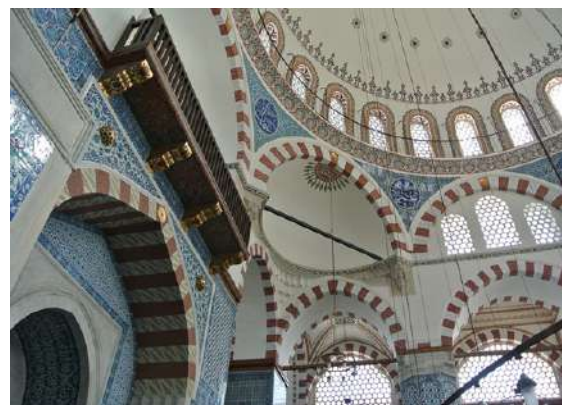
◎ リュステム・パシャ・モスク (Rustem Pasha Mosque)

エジプシャンバザールからほど近い問屋街の判り難い込み入った一角にリュステム・パシャ・モスクはある。階段を上りモスクに立ち入ると周辺の喧騒が嘘のような静寂の空間が広がる。ミマール・シナンが1561年に設計をして1562年に完成しました。

イスタンブールの旧市街で最も賑わいをみせるエミノニュ栈橋の目の前にあり、ハリチ湾を見渡せる丘の上に建設されたモスクは神学校やキャラバンサライ（隊商宿）を備えた複合施設として建てられました。

リュステム・パシャは、オスマン帝国第10代皇帝スレイマンの三代目となる大宰相であり、愛娘であるミフリマーフ（ミフリマーフ）の婿となった人物です。

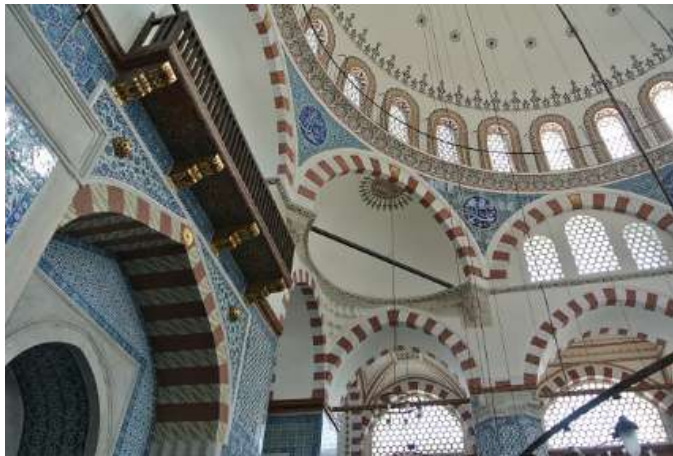
モスクの規模は大きくないですが内部はイズニックタイルをふんだんに使われています。ターキッシュ・タイルとして有名なチューリップをモチーフしたタイルの他に、カアバ神殿を描いたタイルなどがあり青のタイルで彩られたフォトジェニックなモスクは素晴らしいです。



◎ スレイマニエ・モスク (Suleymaniye Mosque)

オスマン帝国が最も反映していた時代のスレイマン1世の時代、1557年に完成したスレイマニエ・モスクはオスマン建築の代表作という。多くのモスク建築を手がけた建築家ミマール・シナンの設計で建設されました。モスクには、4本のミナレット（尖塔）があり、スレイマン1世がイスタンブールを治める4人目のスルタンであることを意味していると言われています。

モスクの空間は約60m四方の床面に高さ約53m、直径26.5mの円形屋根を戴き、美しい装飾で覆われており、たくさんの窓には美しいステンド



ラスから光が差し込んでいます。モスクの敷地内には病院や給食所、学校、隊商宿、バザールといった付属の施設も併設されました。

スレイマニエ・モスクは火災や第一次世界大戦などによってたびたび大きな被害を受けましたが、その度に修復され現在の姿となっています。



◎ トプカプ宮殿 (Topkapi Sarayı)

トプカプ宮殿は、北は金角湾、東にボスポラス海峡、そして南にマルマラ海と三方向が海に囲まれた小高い丘に建っています。メフメト2世によって15世紀半ばに建造された宮殿は、オスマン帝国の繁栄のシンボルとされてきました。トプカプとは「大砲の門」を意味しボスポラス海峡側に大砲があったことからその名がついたとされています。約70万㎡の広大な敷地の宮殿は、歴代スルタンの居城でありオスマン帝国の政治の中枢でもありました。宮殿内にはアヤソフィア側にある「帝王の門」から入ることができ、門の先にある第一庭園にはオスマン帝国時代も現代と同じように一般の人々が自由に出入りできたといいます。第一庭園を進むと「挨拶の門」があり、ここからが本来の宮殿域となり、域内は、外廷、内廷、ハーレム（後宮）の3つに分かれています。

「挨拶の門」の先は第二庭園がある外廷になり、この外廷を囲むように議会議室や厨房などが設けられており、行政の場だけでなく宮廷の儀式なども利用されていました。



第二庭園の左側、宮殿一高い「正義の塔」の下にあるのがハーレム（後宮）です。ハーレムには、母后、寵妃、女奴隷たちが生活した場所で外界とは完全に隔離された場所でした。

第二庭園の奥、「至福の門」の先にあるのが、第三、四庭園がある内廷とよばれるスルタンの私的空間になります。門の先には「謁見の間」がありここでスルタンは政府高官や海外からの大使たちと謁見していました。宮殿一番奥、第四庭園には、ムラト 4 世がバグダット征服を記念し建てられた優雅な休憩所バグダット・キョシュクがあります。

現在、宮殿は博物館として公開されており、中でも「宝物館」には柄には 3 つの巨大なエメラルド、鞘にはダイヤモンドがちりばめられている「トプカプの短剣」、86 カラットの大きなダイヤモンドが眩い光を放つ「スプーン売りのダイヤモンド」などオスマン帝国栄華の歴史を伝える品々が数多く展示されています。

約 400 年間、オスマン帝国の中樞を担っていたトプカプ宮殿ですが、1856 年に新宮殿が完成しスルタンが居城を移すと長い歴史に幕を下しました。

◎ ドルマバフチェ宮殿 (Dolmabahce Sarayı)

ドルマバフチェ宮殿は、新市街の北東郊外ベシクタシュ地区のボスポラス海峡に面した埋立地に位置する。ドルマバフチェとは「埋め立てられた庭」という意味である。

1922 年 11 月 1 日のアンカラのトルコ共和国政府による帝制廃止を受けて、ドルマバフチェ宮殿の裏口から同宮殿を後にする最後の皇帝メフメト 6 世は英国の戦艦でマルタに亡命した。

初代トルコ共和国大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクはドルマバフチェ宮殿のハーレムだった居室で執務し、そこで没した。現在も「アタテュルクの部屋」として、そのときそのまま保管され、公開されている。

コンスタンティノープル (現在のイスタンブール) を征服したオスマン帝国のメフメト 2 世によって造成された庭園に、1843 年にアブデュルメジト 1 世の命によって宮廷に仕えるアルメニア人建築家ガラベット・バルヤン

(1800 年 - 1866 年。バルヤン一族の一人) が設計、従来あった木造宮殿を取り壊して建てられた。1843 年に着工され 1856 年に完成した[1]。以降、1922 年に最後の皇帝メフメト 6 世が退去するまで、トプカプ宮殿に代わってオスマン帝国の王宮として利用された。



ヨーロッパから取り入れたバロック様式と伝統のオスマン様式を折衷した豪華な宮殿で、外観や装飾は近代西洋風であるが、建物の内部は男性向けの空間と女性のための空間（ハーレム）に二分割され、ハーレムには多くの侍女や宦官も勤務した。ボスポラス海峡に向かう面は海側に門と棧橋を備え、宮殿から公道に出ずに船でイスタンブール市内を自由に行き来できるようになっている。

宮殿の面積は 45,000m² で、285 の部屋、46 のホール、6 の浴場（ハمام）、68 のトイレがある。

オスマン帝国の皇帝がいなくなった後も、政府の迎賓館として使われている。トルコ共和国の初期にはイスタンブールにおける大統領の執務所として用いられ、1938 年に初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクはこの宮殿で亡くなった。今でも「アタテュルクの部屋」の時計は、彼が亡くなった 9 時 5 分で止まっている。



◎ イスタンブール地下宮殿（Basilica Cistern）

地下宮殿は東ローマ帝国時代の大貯水槽として作られました。現存する東ローマ帝国の貯水池としては最大のものであり現在是一般にも公開されてイスタンブール歴史地域の世界遺産にも登録されています。

講堂のような大きさの規模の貯水池は東ローマ帝国の皇帝ユスティニアヌスによって建設されたものです。

貯水槽は奥行き約 140m、幅約 65 m、高さ約 9m の大きな空間です。1 列 12 本の柱が 28 列あり合計 336 本の大理石円柱で支えられています。この大空間には 78,000m³ の水を貯えること



ができます。一部は目玉飾りで覆われた柱身やメデューサの顔が彫られた古代の石塊を土台に使用し再利用されている。

この貯水池は映画（007 ロシアより愛をこめて）の撮影場所として使われたことが有り、その後補修作業や地下に下りる階段及び鑑賞用通路の整備を行い 1980 年から一般公開されている。

◎ ヴァレンス水道橋

この水道橋はアタチュルク大通りと交差して約 800m 現存している。ローマ帝国時代に建設が始まりヴァレンス時代の 378 年に完成した。市街地の北にあるベオグラードの森からローマ時代に作られた貯水池（現在のイスタンブール地下宮殿）に大量の水を運んでいた。18 世紀まで使われていたが現在は使用されてなく橋の上部にも登れない。



◎ セマー儀式

セマー儀式はイスラム神秘主義（スーフィズム）の一派であるメヴレヴィー教団による旋回舞踊の儀式です。13 世紀のコンヤで教団を設立したメヴラーナ・ジェラレディン・ルーミーの教えを表しています。

旋回舞踊はセマーでは白い装束を来た踊り手（セマーゼン）が左足を軸にして右足でくるくると回り続けます。舞踊の回転は神（イスラム教のアッラー）を象徴するため、半回転は「アッ」もう半回転は「ラー」を表現しています。右手を上左手を下に向けて踊り、右手は神からの啓示や導きを受け取り左手で地上の人々にそれらを与えることを象徴しています。



◎ イスタンブールのトラム・ケーブルカー・地下鉄

イスタンブールの市内交通として地下鉄、トラム（路面電車）、ケーブルカー、近郊電車、市バス、シーバスなどが運行されています。更に新たな地下鉄の整備も進められています。

トラムは 19 世紀に作られましたが、一旦廃止されてその後新型トラムとして再整備がされました。ヨーロッパ側の旧市街地と新市街地を結ぶ地区には最新鋭のトラムが運行されていて、更に郊外へ延びるトラムは全線専用軌道で地下区間も多くライトレール路線として整備されている。



新市街のイスティクラール通りにはノスタルジックトラムが、廃止された軌道を復活させ観光用として運行されている。



◎ ボスポラス海峡及び横断橋と海底トンネル

ボスポラス海峡は北の黒海と南のマルマラ海の間を南北に約 30 km の海峡で、南にあるマルマラ海とエーゲ海を繋ぐダーダネルス海峡とあわせて黒海と地中海を結ぶ重要な海上交通と成っている。海峡の幅は最も狭い箇所約 700m、最も広い地点で約 3700 メートル、水深は 30 メートルから 120 メートル。

黒海とエーゲ海を結ぶ重要な海峡として、またアジアとヨーロッパの境としての海峡として有名です。

昔から海峡の横断は船でしか出来ず両岸の各所に船着き場が点在しており、橋梁やトンネルが出来た現在でも多くの定期横断航路が運航されている。

現在は 3 箇所に海峡横断橋が出来ています。第一ボスポラス橋（ボアジチ大橋）1074m1973 年、第二ボスポラス橋（ファティフスルタンメフメト橋）1090m1988 年、第三ボスポラス橋（ヤウズスルタンセルム橋）





1400m2016 年と、40 数年掛けて三本の橋で結ばれました。第二ボスボラス橋は日本政府の経済援助で日本企業が参画して建設されました。

また海峡の海底トンネルは地下鉄のマルマライ鉄道のマールマライトンネルが 2013 年に日本の大成建設の工事により完成しました。2016 年には自動車専用のアブラシャトンネルが完成しています。現在は 3 箇所目のトンネルとして自動車と鉄道の併用トンネルの建設が進められています。

<LFJブックレビュー 90>

『ルネサンス理想都市』 中嶋和郎著 講談社選書メチエ 77

1996 年刊

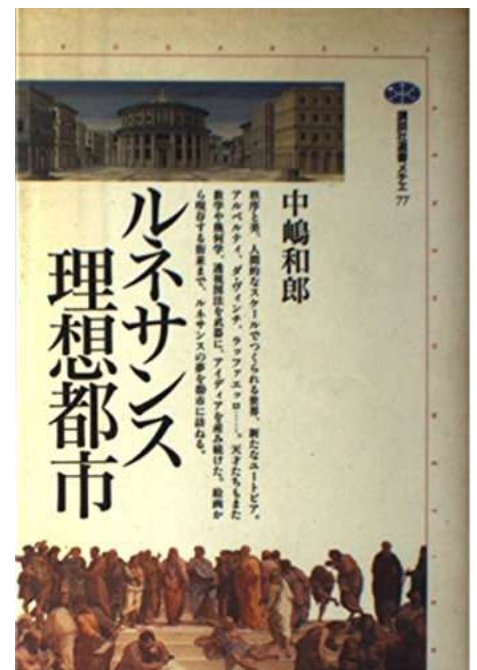
齊藤全彦

ルネサンスという言葉聞いて先ず念頭に浮かぶ人物とは、恐らく殆どの人がレオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）を考えるのではない。だが、今回の主人公はルネサンス時に理想都市を考え且つ創り上げた人物である。レオン・バッティスタ・アルベルティ（1404-1519）はレオナルドよりも半世紀程前に活躍した人物である。確かに、「ルネサンス最初の建築家は、ブルネッレスキ(1377-1446)だと指摘される」ことになっている。「彼は透視図法、すなわち三次元のものを二次元の紙のうえに表す方法をはじめて科学的に定義した」とされる。まさにルネサンスに於ける「規則と秩序への願望の体現でもあった」ということになる。ブルネッレスキを師としたアルベルティはその思想を継ぎ透視図法は『絵画論』で、建築と都市の新しい概念は『建築書』で明らかにされた。「広場の大きさ、建物の高さなども明確に定義し、ゾーニングのアイディアなど都市的考察に満ちており、その後の都市計画の基礎となり、都市全体も一つの美的合理的構成として設計されるようになった」とのことである。

さて、1516年にトマス・モア（1478-1535）によって刊行された『ユートピア』は、新大陸発見から自然に従って生き、私有財産を持たない共同社会が実在しうる事を確信したことによる成果である。このユートピアコンセプトに影響を受けた建築家たちは、実現可能な理想都市というものを次々に考えた。先ず、アルベルティは「理想的社会という考えを一つの街の計画に関する具体的規則に結び付けた」ことであり、「都市を合理的に分節化しようとした」ことにその創造性がある。円形都市、それをもとに考えた星型都市、人間の肉体をもとに考えた都市、また、当時の政治的要請から考察された数限りない要塞都市モデルが出現し、それらの共通項は都市の中心に広場が存在していた。

やはりこの時代の三大天才の理想都市を書かねばなるまい。先ずレオナルドは都市の中に水の活用を徹底的に追求した。上流から流れてくる水を都市の中に漫勉なく活用するというものである。そして都市を鳥の目で見考察するという考え方であり、理想都市を考える場合の基本的拠り所となった。次に、ラファエッロは都市の基礎形態に円形の理想を唱えた。そしてミケランジェロはルネサンス広場と称される「カンピドッリオ広場」を創造し、ルネサンスの理想的広場を提示した。そして、近代の始まりとして、都市間の競争に備え軍事的理想都市が考えられ実現もされた。ここで、ルネサンスの理想都市のコンセプトを考えてみよう。第1に、人間的スケールがある。第2に、城砦のようなもの、境界がはっきり明示されていること。第3に、都市の中心に必ず広場がある。第4に、統一性があり、プロポーションに優れた美しい建築的秩序で統制されている。最後に、都市全体の構造と形態が明確に計画されていること。

西洋の都市が以上のコンセプトで成り立っていることを考えると、では東洋は如何にと考えることは無駄ではないであろう。（齊藤全彦）



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

